２．近畿圏の自然環境の特性

２－１．気候

（１）気候区分

近畿圏には、地形や海洋との関係による降水量の多寡とその季節配分による地域的な差異がみられ、我が国の代表的な気候型が含まれる。

主な気候区として圏北部の日本海側気候、南部の太平洋岸型気候に分かれる。太平洋岸型気候はさらに南海気候区、東海気候区、瀬戸内気候区に細分される。（図エラー! **指定したスタイルは使われていません。**-1）

１）日本海側気候

丹波や但馬を中心とする日本海側は冬のモンスーンの影響が強く、雪による多量の降水と曇天が特徴である。積雪量の違いから山陰気候区（少雪）と北陸気候区（多雪）に分けられることもあり、近畿圏の北部は両者の移行地域にあたる。芦生周辺（京都府）や湖西北部から湖北周辺（滋賀県）に著しい多雪地帯が存在する。

２）太平洋岸型気候（南海気候区）

主に紀伊半島一帯が含まれる。黒潮暖流の影響が強く冬期も温暖であり、海岸部においては一部の亜熱帯性植物の北限となっている。また、大台ヶ原（奈良県）を中心とした紀伊半島山岳地帯は日本でも有数の多雨地帯となっている。

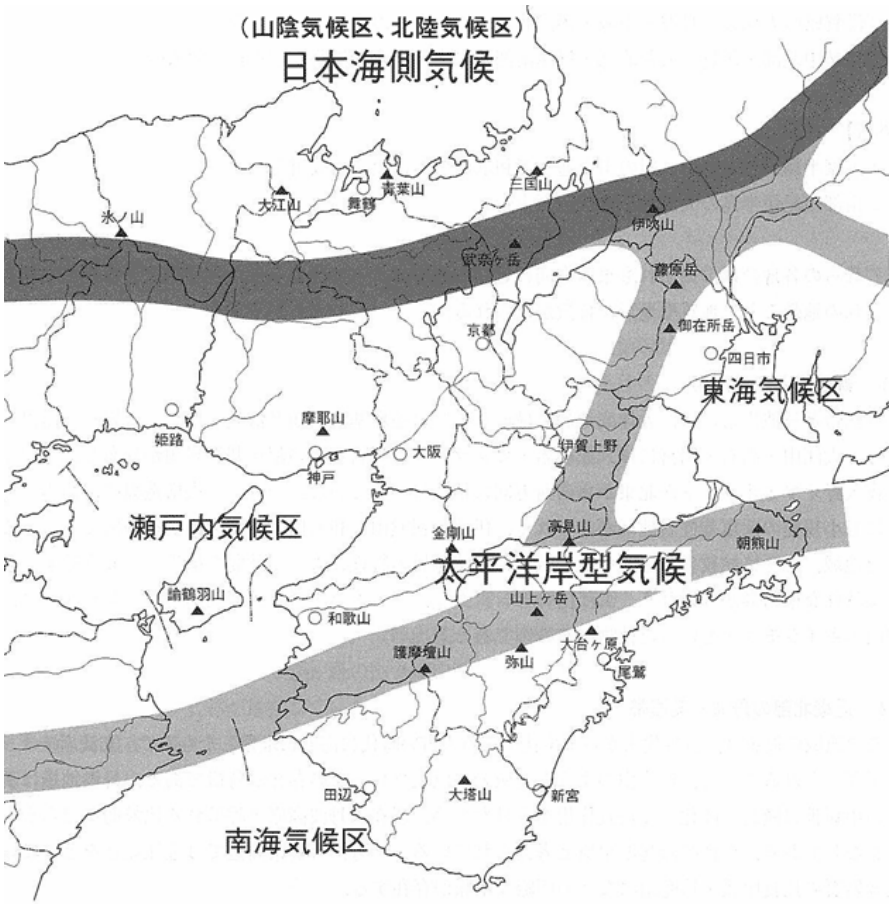
３）太平洋岸型気候（東海気候区）

伊勢地方を中心として分布し、近畿圏においては滋賀県南部および奈良県東部の一部が属する。夏期の前後に降水が集中し、冬期に乾燥する気候型となっている。

４）太平洋岸型気候（瀬戸内気候区）

近畿圏の中央部にあたる淡路島・播磨・大阪平野・奈良盆地周辺にまたがる瀬戸内地域は、年中少雨で晴天の続くことが特徴である。これは、冬の季節風は日本海側に降雪をもたらした後に瀬戸内に流れ込むため乾燥が激しく、夏の季節風は太平洋側に大量の雨を降らせるので瀬戸内には乾燥した空気が流れ込むためである。そのため、この地域では古代より水不足に悩まされ続けてきており、潅漑を目的とした多数のため池が点在する。

また近畿中部の各盆地においては、基本の年較差および日較差が大きく、降水量の少なさとあいまった内陸型の気候を示す。



図エラー！ 指定したスタイルは使われていません。-1：近畿圏の気候区分

出典：「改訂・近畿地方の保護上重要な植物-レッドデータブック近畿 2001-」
レッドデータ近畿研究会編に加筆修正

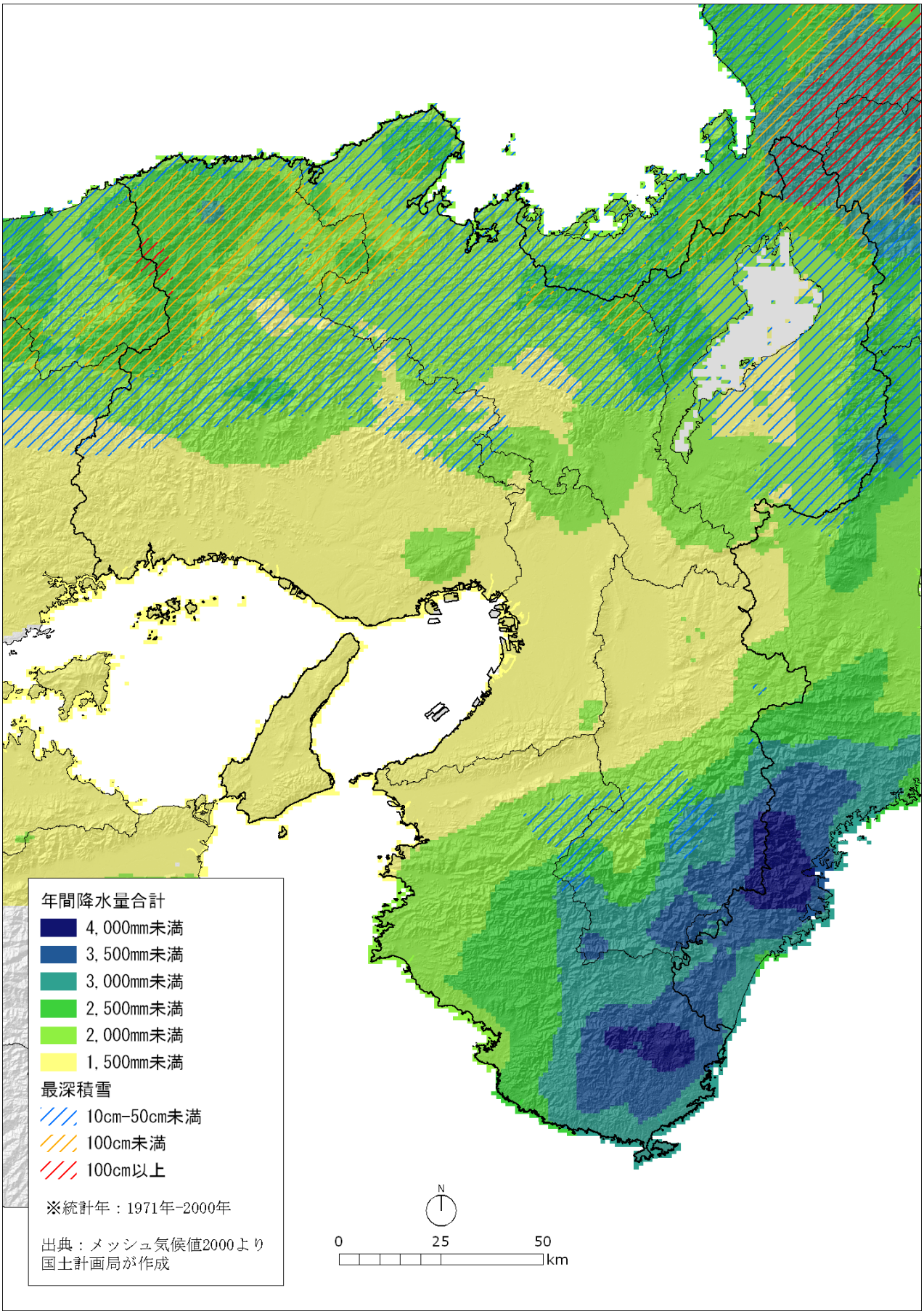
（２）降水

３次メッシュ単位での年間降水量の分布をみると、瀬戸内海気候区における年間降水量が1,500㎜ 未満であるのに対し、南海気候区においても特に紀伊半島山岳地帯では本州最多雨の大台ヶ原山（4,800㎜）をはじめ、3,500㎜以上の地域が分布するなど地域により大きな差異がみられる。

最深積雪の分布は、美濃山地を中心とする滋賀県北部、および氷ノ山周辺の兵庫県北西部の山地に100㎝以上の地域がみられる。（図エラー！ **指定したスタイルは使われていません。**-2）

降雪の限界は北部の日本海側気候区を中心に鈴鹿山脈北部から西に滋賀県中部を横断し、京都盆地の北方、福知山盆地の南方を経て兵庫県中部の氷ノ山に延びる線に代表される。[1]

[1]「日本地誌（第13巻）近畿地方総論」尾留川正平、青野嘉郎編，二宮書店



図エラー！ 指定したスタイルは使われていません。-2：年間降水量、最深積雪の分布

２－２．地形

（１）地形区分

近畿圏は、その地形で大きく分けると、敦賀湾から伊勢湾にいたる線、琵琶湖から淡路島西岸にいたる線、南辺の中央構造線の３辺で囲まれる近畿三角帯、中央構造線の南側に位置する紀伊山地の外帯山地、若狭湾から丹後山地・丹波高地、瀬戸内海側の播磨平野周辺に至る内帯山地の区域に分けられる。[2]（**エラー！参照元が見つかりません。**,**エラー！参照元が見つかりません。**）

１）近畿三角帯

近畿圏の中央に位置する近畿三角帯では、日本第一の大湖である琵琶湖を囲むように、南北に近い走向の隆起地帯にあたる鈴鹿・比良・生駒などの、延長 20～50km、標高 800～1,200mの低標高の諸山地と、沈降地帯にあたる大阪平野と近江平野、京都・奈良などの地溝盆地が交互に配列し、中央部は笠置・信楽両山地からなる平坦な高原状になっている。

この地域は、第四紀後期の地殻変動により形成されており、日本列島の中でも特に細かい地形の単位に分かれている地域となっており、これら著しい地形変動の現れとして三角帯内部には多くの活断層が高密度で分布している。

２）外帯山地

紀伊山地は急峻な山地斜面と深い峡谷で特徴付けられる。ブロックの最高峰八剣山（仏経ヶ岳）（1,915m、奈良県）を中心に、1000m～2000m 級の山脈が連なる。全体として中央部が盛り上がる曲隆山地であり、熊野川等の河川が四方に放射状に流れている。山地が海にまで迫っており、紀伊山地では一般に平地が極めて乏しい。紀伊山地の北部隆起帯も、三波川帯・秩父帯・四万十帯の岩石で構成されており、紀伊山地南部は、熊野酸性岩や中新世の堆積岩からなる。

３）内帯山地

比良山地から西に続く丹波高地は、全体としてゆるく西に傾き、由良川、保津川などが山地内を蛇行して峡谷を形成している。福知山盆地、加古川の低地をこえると高度が増し、中国山地に連なる。中国山地の非火山性の最高峰は氷ノ山（1,510m、兵庫県）であり、その北東には脊梁山地から日本海側に北東に張り出した丹後山地がある。また丹波高地周辺には瀬戸内海と日本海を結ぶ低地（氷上回廊）、篠山盆地などが分布する。

瀬戸内海側には、播磨平野が広がる。漸新世の神戸層群および鮮新～更新世の大阪層群を基盤とする、緩やかに西傾斜する東播磨丘陵、台地が分布し、西部では中・古生層または流紋岩を基盤とする低平な沖積低地が見られる。

４）島しょ

島しょ部では、明石より明石海峡を隔てて瀬戸内海上に横たわる淡路島がある。淡路島は北北東～南南東に延びる長軸約 53km、短軸約 27km の面積約 592k ㎡の大島であり、南部には諭鶴羽山（608m）・柏原山（509m）を主峰とする諭鶴羽山地が位置する。淡路島の西方、姫路の沖合には東西 26.7km、南北 18.5km にわたり大小 40 余の島々で構成される家島諸島が浮かぶ。

---

[2] 「日本の地形６　近畿・中国・四国」太田陽子・成瀬敏郎・田中眞吾・岡田篤正編，東京大学出版会